

〈特別講演〉

ジッドの『アンリ・ミショーを発見しよう』

—— 1941年のニース講演中止をめぐる ——

吉井亮雄

本稿が対象とする事件の内容は、ジッド自身や関係者らの証言・記録によって、すでにある程度詳しく知られている。すなわち大筋としては、1941年5月にジッドが南仏ニースで行おうとしたアンリ・ミショーにかんする講演が、ベタン政権の御用団体「在郷軍人奉公会」の妨害によって中止されたというもので、多少なりとも詳細なジッドの年譜にはたいてい記載されている挿話である。この事件について、既知の関連文献のほか、筆者が参照することのできたいくつかの未刊資料をもとに、さらにいっそう鮮明な全体像を提示したい。論述の実質は、いわゆる実証的・文学史的な調査成果の報告ということになる。

本稿にながしかでも学術的な意義の備わるとすれば、それは未刊資料の活字化という一事に尽きる。ジッドの『日記』や書簡を公表するにあたり、カトリーヌ・ジッド女史は筆者の要請にいつもと変わらぬご理解を示された。また当時の『フィガロ』紙主筆ピエール・ブリソン（その後も1964年まで在任）がジッドに宛てた2通の書簡については、ご子息ジャン＝フランソワ・ブリソン氏が懇切な書面をもって公刊をお認めくださった。両氏のご厚情にたいし、ここに記して深甚なる謝意を表する。なお、以下の論述ではこれら一次資料は拙訳で示し、フランス語原文は補遺として稿末に掲げる。

ニース講演にいたる経緯

ジッドとミショーとが交わした手紙のうち、これまでに現存が確認されているのはわずか4通（ジッド書簡1通、ミショー書簡3通）にすぎない。それもあって両者の具体的な交流については不明な点が多い。2人がニース講演中止の翌月に会っていることは確かだが、それが初対面であったか否かも今ひとつ定かではない。その前年、1940年の秋から暮れにかけて相まみえていた可能性も小さくはないのである。だがいずれの場合であれ、すでにフランスを代表する大作家だったジッドと、当時はまだベルギー国籍で、知名度もさほど高くはなかった詩人ミショー（1899年、ナミュール生まれ）との出会いが、文学を愛する2人の女性との交友を機縁に成立したものであるのは間違いない。2人の女性とは、アリーヌ・マイリッシュ、そしてマリア・ヴァン・リセルベルグである。

アリーヌ・マイリッシュは、ルクセンブルクの富豪エミール・マイリッシュの妻で、英・独・

仏の多くの文学者・芸術家と交遊があった文学メセナ。ルクセンブルク市郊外のコルパハの城館で文化サークルを主宰したが、この文化サークルは、その規模・広がりにおいてポール・デジャルダンの「ポンティニー旬日懇話会」（スリジー・ラ・サルシンポジウムの前身）に勝るとも劣らないものであった。ミショーは1935年に、哲学者ベルンハルト・グレットウイゼンの仲立ちで、このマイリッシュ夫人と親交を結び（後年ミショーは夫人追悼の記念文集で「彼女とは他の誰にもまさる友人同士であった」¹¹と述懐している）、南仏アルプ＝マリティーム県のカプリス（郡庁所在地グラス近郊）にあった彼女の別荘ラ・メスュギエールにも幾度か逗留している。同じくカプリスに別荘があった彼女の親友マリア・ヴァン・リセルベルグは頻繁にラ・メスュギエールを訪れたが、そのさいしばしば同行したのが、やはりマイリッシュ夫人とは旧知の間柄だったジッドであり、上述のように遅くとも1941年の半ばまでには夫人宅でミショーとも会う機会があったのである。

マリア・ヴァン・リセルベルグ、通称「プティット・ダム」はジッド研究者にとっては周知の人物だが、手短かに説明しておく、夫の画家テオともども早くからジッドと親交を結んだベルギー人女性で、パリに移住後は、まさにジッドの盟友と呼びうる存在となった。とりわけ夫妻の娘エリザベートがジッドとのあいだに非嫡出子カトリーヌをもうけたことは有名である（ジッドは妻マドレーヌの死後、このカトリーヌを養子にとる）。また1920年代後半からは、ジッドとヴァン・リセルベルグ夫妻とはヴァノー街のアパルトマンで隣同士に居住するが、壁を改造、そこにドアをつけて2世帯が容易に行き来できるようにし、毎日のように食事をともにしたほどの間柄であった。マリアの最大の功績は、身近で生活するジッドの日々の言動を1918年以来、なんと30年以上にわたって、しかも当人にはまったく気づかれることなく記録しつづけたこと。エッカーマンの『ゲーテとの対話』にも比すべきこの膨大な記録『プティット・ダムの手記』は、まさに第一級の同時代資料だが、ミショーにかんするジッドの感想・評価を含め、講演中止事件のさいのジッドの言動についてもいくつか重要な証言を残している。

さて、これら2人の女性の交友を機縁にジッドはミショーと面識を得るわけだが、詩人にたいする彼の関心は少なくともその数年前に溯る。とりわけその裏付けとなるのが、1933年6月に俳優・演劇作家ルイ・デュクルーに宛てた手紙である。この手紙のなかでジッドは自らを「ミショーに大いに注目し、またミショーに魅了された読者」²¹と明確に規定している。また、それがけっして誇張でなかったことは『プティット・ダムの手記』の記述によっても確認できる。たとえば1935年5月の手記には、「今日ジッドは新フランス評論に立ち寄ってミショーの『夜動く』の校正刷を読んだ。彼が言うには、〈大変な才能に恵まれた人間だ。私は彼の作品をこよなく愛する〉」³¹とある。またその2年後の手記には次のような証言が残されている——「ジッドはミショーの『夜動く』を読んでいる。彼が言うには〈この作品がものすごく好きだ。私自身が書きたかったような作品だ。〔…〕そこには詩情と美点があふれている〉」⁴¹、云々。（ただし、ジッドが読んでいたもうひとつの作品、1929年発表の旅行日誌『エクアドル』にたいする評価は必ずしも高いものではなく、そのことは後に公刊された講演テキスト『アンリ・ミショーを発見しよう』の論述内容からも窺われる）。

以上のような経緯の後、1940年暮れの『ブティット・ダムの手記』は、これ以上はないというほどの熱をこめて『夜動く』を読むジッドの姿を伝えている——「ジッドは『夜動く』を再読中である。熱狂するほどにこの作品が大好きなのだ。ノートを取っているが、ミショーにかんする、朗読を交えた講演を強く想定しているのだろう。彼はミショーのうちに、尋常ならざる言葉の才能、突飛さのなかに潜む一種の誠実さ、また〔表現の〕正確さを見て取る。〔…〕彼はミショーに手紙を書いているところだ。『夜動く』の第2部から引いた一連の詩篇を我々に読んで聞かせてくれる」⁶⁾、云々。この証言からも、『夜動く』にたいする熱狂——場合によっては、詩人と面識を得たことを機に再燃した熱狂かもしれない——が元となってニース講演が発案・準備されたことは疑えない。なお、ジッドが送ったという手紙は保存されていないが、ミショーからの返信は、ジッドの慧眼を称え、また自分を講演の対象に選んでくれた好意にたいし深い感謝の意を表している⁶⁾。

ちなみにニースでの講演にあたっては、あるひとりの青年の存在が欠かせなかった。当時弱冠21才、後に作家・文学ジャーナリストとして名を成すロジェ・ステファヌ（本名ロジェ・ヴォルムス、1919-1994年）である。パリの裕福なユダヤ人家庭に生まれた彼は、ナチス支配を嫌って、しばらく前からニースに移り住んでいた。なんら生活に不自由することはなかったものの、自立の道を文学・芸術活動に求めて文化人による連続講演を企画する。その企画の目玉にと彼が選んだのが、2年ほど前（1938年の暮れ）、たまたまパリの路上で姿を見かけ、大胆にも声をかけたことから自宅に呼ばれるという僥倖をえていたジッドであった。ジッドのほうでも、同性愛者であることをためらいなく公言するこの才気煥発な若者に親近感を覚えており、講演の依頼にすすんで乗るかたちとなったのである。なおステファヌはいくつかの自伝的著作のなかでニース講演中止の経緯について書き残しており、それがこれまで公にされた証言では最も詳しい内容のものであった⁷⁾。

事件の叙述（ジッドの未刊の日記）

ステファヌの証言はそれなりの実質をともなっているが、これと比べてもさらに一段と詳細なのが、本稿冒頭で触れたジッド自身の未刊の日記（5月23日付）である。1996-97年刊の『日記』プレイアッド新版は、旧版全体の3分の1にも相当する大量の未刊記述を増補したが⁸⁾、パリ大学附属ジャック・ドゥーセ文庫が現蔵するこの断片稿（整理番号γ1532）についてはその存在にさえ言及していない。明らかに見落としによる収録漏れである。まずは当該稿の物理的な側面から述べておくと、縦17センチ、横11センチ大の小型手帳から切り離された黒色野線入りの7葉からなり、うち4葉は裏面も使われている。記述はすべて青インクをもちいたペン書きの自筆。ジッドの日記帳の使用法は多くの場合、見開きの右頁（つまり各葉の表面）に日々の記録を書き、左頁は追記や補注、各種のメモのために空けておくというものだが、この場合も同様であって、裏面4頁に書かれているのはほとんどが事後の追加・補足である。

資料の紹介をかね、ニース講演中止の2日後に認められたこの日記によって事件の概要を提示

ジッドの「アンリ・ミショーを発見しよう」

しよう。日付につづく導入部では、ジッドがかつて同性愛の対象として熱愛したマルク・アレグレの名が引かれる。ジッドは数日来、マルクが夏を過ごすために借りた快適なコテージに滞在しているのである。カンヌのすぐ近くだが、実に静かな場所なので無用な雑事に煩わされないで済む、といった旨が短く記されたのち、話題は本筋のニース講演へと移る――

私は事の成りゆきまかせて、ある講演を引き受けていた。ロジェ・ステファヌがたいへん熱心に企画していた講演である。ジョルジュ・オーリック〔サティやコクトーを擁護者とする「6人組」に参加した作曲家〕がその連続講演の口火を切っていたが、私はその翌週の水曜日、つまり一昨日のことだが、アンリ・ミショーにかんする「朗読を交えた談話」をすることにしていた。講演当日の朝にステファヌが、私に宛てた一通の手紙が講演会場のリュール・ホテルに届いたことを電話で知らせてきた。ステファヌは好判断を働かせて手紙を開封していたのだが、それは在郷軍人奉公会の幹部のひとりから送られたもので、皮肉のこもった慇懃な手紙であった。内容は、〈悪しき師^{モヴェイートル}〉として私が及ぼした良からぬ影響によって青年たちを退廃させ、ひいては祖国敗北の大きな原因を作った責任を自覚し、恥辱と不名誉のうちに口を閉ざすという「気配りと知性」が私に認められない場合には、在郷軍人奉公会としては講演を妨害しようというもので、そういったことが言葉を巧みに選んだうえでの無礼な調子で書いてあった。

この記述に関連してジッドは、在郷軍人奉公会からの手紙の全文を手帳の左頁に忠実に転写している。情宣部門の責任者ノエル・ド・ティツソが署名した手紙の主旨はジッドの要約するとおりだが、さらにその原文から引けば、「ペタン元帥がフランスの青年たちに自己犠牲の精神を奨励せんとしているこの時局にあつて、悦楽・享楽の精神を得意満面で擁護する者のひとりが演壇に上がることはとうてい認めがたい」、というものであった⁹⁾。日記本文の引用を続けよう――

講演は夜の9時からだったが、6時ころには会場のリュール・ホテルのバーに諮問委員会のようなかたちで、ロジェ・マルタン・デュ・ガール、マルセル・アシャール、ロジェ・ステファヌ、そして（マルタン・デュ・ガールが電話で知らせた）アンドレ・マルローらが集まった。マルローが実に明確に述べてみせた考えは、在郷軍人奉公会は非常に多数の会員を擁してあり、警察の同意や保護・支持をえている、つまり一言でいえば警察と共謀しているだけに、その意向に逆らうのは賢明ではない、というものであった。言いなりになるしかなかった。弥縫策を講ずるほかはなかったのである。

しかしながら、その一方でマルク・アレグレは在郷軍人奉公会の幹部のひとり、アクア・ヴィヴァ氏と接触し、長い折衝ののち我々に、奉公会としては熟慮の末、拒否権は行使しないことになった旨を知らせてきた（とは言うものの、私の講演テキストは当局の検閲をへて予め許可を得ていたのだが）。マルク・アレグレは機転を利かせて尋ねてみた――「すると、あの侮辱的な手紙のことは撤回なさるのですか。ジッドに対する非難を取り下げるといふこ

とでしょうか。それに対する返答——「まったく違う。ただ我々としてはジッド氏が話するのは妨げないということだ」。

奉公会の諸氏にはまことに有難いことであるが、私としてはあなた方の恩着せがましい態度よりもはっきりと禁止していただくほうがずっといい。この無礼な侮辱を受けたあと、それでもやはり講演をさせてくださるといって私はあなた方に感謝しなければならないのか。検閲担当部署が与えた許可だけで十分であって、本来あなた方の許可など必要ではないのだ。私はあなた方の前から身を引き、あなた方にはこの勝利がもたらす悲しき栄誉を残しておく。だが、私の話を聞きにきた聴衆は、私が沈黙するその訳をはっきりと理解することだろう。

聴衆の数は多かった。私が予期したよりも多く、また熱狂的であった。座る席のない人も多く、聴衆は大会場の奥まで溢れるほどだった。土壇場での指令にしたがい奉公会の会員たちは退席していたが、それでも多くの入場希望者を断わらなければならなかった。私が登壇すると割れるような喝采が上がり、それがあまりにも長く続くので私は手振りで聴衆を制しなければならなかった。マルク・アレグレが貸してくれた三つ揃いの背広と靴は私にぴったりのサイズで、まったく着心地・履き心地がよかった。私は心穏やかであると同時に高揚し、さらにはひどく楽しい気分だった。そして壇上の端に置かれた机に上半身を乗り出すように立ち、しっかりとした、よく響く声で、準備していた短い原稿を読んだ。

このように記したのちジッドはスピーチの原稿を転写する。細かく段落を区切っているのは、聴衆の喝采で発話がしばしば途切れたことを示すためであろう（じじつロジェ・ステファヌは「喝采に遮られ、ジッドがその10行を読むのには5分もかかった」¹⁰⁰と、事件翌日の日記に書き留めている。ちなみにジッドが後続部分で「2度にわたり中断」と記すのは、とりわけ長い中断のことを指しているのだと思われる）——

「諸君。

フランス人のあいだに不和・反目があってはならない、それこそが何よりも私が気にかけるところであります。

今日の午後、人をつうじて在郷軍人奉公会からの脅迫状を渡されました。

奉公会の方々が私の人品や私の作品、私の行動について誤解しようとも、それはほとんど重要なことではありません。この場合にあっては自尊心など問題ではないからです。

最後の最後になって奉公会は私の講演を許可するつもりだということが分かりました。

しかしながら私の考え方に変わりはありません。すなわち、フランス人のあいだに不和・反目があってはならない。対立を生じさせるきっかけを作るくらいなら（とはいえ、この講演は検閲担当部署、文民当局・軍事当局による許可をえていたのですが）、むしろ我々としては口を閉ざそう、というわけであります。

事が芸術に関わるものであるかぎり、私には依然として戦う用意はある。だがフランスの

利害を深く憂慮する者としては、単なる誤解をとらえて徒に事を荒立てるわけにはいかないのです。』

なお、このスピーチを転写した箇所左頁には、明らかに事後の追記が2つある。最初の記述には日付は打たれていないが、会場での発言にたいする反省が次のように述べられる――

たしかにこのスピーチのとおりである。しかし「フランス人のあいだに不和・反目があったはならない」と公言することで、おそらく私はひどく踏み込んだ発言をしている。ヴィシー政権は暫定的な政権なのに、私はその綱領・指針に先々まで一貫して賛同する者だと見なされかねない。将来を拘束するような宣言はすべて思慮を欠くものと言えよう。

いっぽう2番目の追記は、6月5日、すなわち事件から半月後のもので、「会場の模様にかんする冗長な話はこの手帳のなかでは不要な記述だ。仮に私の『日記』が出版されることになったとしても、そこには入れないようにしよう」というもの（また、いつの時点でのものかは定かでないが、この箇所には赤鉛筆で太く印がつけられている）。プレイアッド新旧両版の場合は明らかな遺漏であるが、ジッド存命中に出版された当該時期の『日記』にニース講演中止の叙述が小さい載っていないのは¹¹、おそらくこの追記の内容と無関係ではあるまい。

ひるがえって日記の本文にはどのように書かれていたのだろうか。スピーチを転写したジッドは次のように続けている――

このテキストを再読してみて、それが言わんとするところは読まれ方によって変わる、ということがよく分かった。私が実際に会場でした読み方は聴衆の憤慨と熱狂をかき立てるものだった。まことに短いものではあったが、熱狂的な喝采が沸き起こり、スピーチは2度にわたり中断されたのである。私が「憤慨」と言ったのは、「奉公会に対する憤慨」という意味だ。これにつづいて若干の混乱があった。人々の多くは、私がすぐに演台から降りるのを見ても催しが終わったことを未だ理解できていなかったのである。制服を着た会場係が席料は返却される旨を伝えに来た。ステファヌにとってはかなり辛い話だ。というのも8,000フランの収入のかわりに、今夜の催しのための出費は（ポスターの代金や会場の賃貸料で）2,000フランに上るからである。だが彼の態度はとてもスマートで、費用は持とうという私の申し出を聞き入れようとはしない。また彼は、今夜の催しが失敗であるどころか、仮に講演がどんなに大成功だったとしても、それよりもはるかに大きな意義があったと、心からそう言ってくれる。人々は座席から腰を上げはしていたが、会場にとどまっていた。私は慎みの気持ちから舞台の袖に隠れていたのが、彼らが話している内容は聞こえなかったが、その身振り・手振りの大きさから、どういうことかは容易に推測することができた。

私が勝ちを収めたことは間違いあるまい。いくぶん巧妙・狡猾なやり方ではあったが、奉公会の意に反して講演をすることで得られたよりもずっと効果的な勝ち方だった。私の話を

聞きに来た740人は、おそらく一握りの頭の固い連中を除けばみな、奉公会に憤慨して会場を後にした。そして手紙の署名者ノエル・ド・ティツソは、事件がどのように展開したかを知って恥じ入ったに違いない。(聞くところでは、彼は上司の数名からひどく叱責され、アルプ＝マリティーム県の奉公会としても、すでに注意を受けていたが、さらに懲罰のおそれがあるという)。しかしながら、あまり声高にこの勝利を吹聴するのは賢明なことではあるまい。今後、その代償を払わされる虞があるからだ。またさらに奉公会の連中としては、勝利を取めたのは自分たちだと主張しうる立場にはある。なにしろ私の講演を妨害するという目的は果たしたのだから。連中にはこの妨害の事実をこそ吹聴して欲しいものだ……。その間に事件については一切報じてはならぬという禁令が新聞各紙にたいして出た。『レクレール』と『ル・プティ・ニソワ』[いずれも地元紙]が講演が行われなかった旨を報じただけである。そういうわけで私が当てにすることができるのは、ただその場に居合わせた者たちが事の次第を抗議のかたちで語り伝えてくれることだけなのだ。

一部の奉公会会員が憤慨して退会したというのは事実かどうか知りたいものだ。

この引用の最終文には参照番号が振られ、5月27日付で次のような補足が手帳左頁に書き付けられている——「ヴォートラン司令官が私に語ったところでは、退会者の数は160名。司令官自身は、検閲担当部署の統括者で情報に通じているはずのラバからこの数を得ている。(さらにこの数は2日後には180に増えた)」。これに関連して付言すると、オリヴィエ・フィリップナとパトリック・リーンハルトの共著書『ロジェ・ステファヌ』によれば、退会者は6月半ばの時点では280名に上ったという¹²⁾。奉公会の会員たちは実際には開演前に会場を去っていたわけだから、この退会者続出の事実は、聴衆をつうじて当日の噂が素早く広まった証と見てさしつかえあるまい。

さて日記本文の最後は、段落ごと大きな罰点で消されているが、マルタン・デュ・ガールの反応を伝える一節である——

ロジェ・マルタン・デュ・ガールはこの講演には大反対だった。だが彼の主張する考えは私を説得しうるものではなかった。そして私がそのことを漏らすと、彼は言った——「あなたはいつまでたっても変わらない。だから、あなたが自分のことを真面目に考えることはけっしてないだろう」と。そして今夜の出来事が驚くほどの成功だったとは認めながらも、つぎのように言うのだった——「ああ、なんて事だ、あなたはそんな成功をおさめるような立場にはなかったのに。だがいつも上手く切り抜けてしまう。あなたという人はいつだって運のいいお方だ」。

マルタン・デュ・ガールが当初から講演の企画に強く反対していたことはマリア・ヴァン・リセルベルグの証言からも窺えるところだが¹³⁾、ジッド自身はそのことをほとんど意に介していなかった。じっさい事件から10日ほど経った6月2日にも、マルタン・デュ・ガール当人に宛てた手

ジッドの「アンリ・ミショーを発見しよう」

紙で次のように述べている——「あなたはこの出来事を本当に残念なこととお考えになれるのでしょうか？ 私としては残念なことだなどとは思いません」¹⁴⁾。ジッドはこの時点ではまだ自信をもってそう言い切ることができたのである……。

「在郷軍人奉公会」

以上が未刊の日記の全容であるが、事件のその後の流れを追うに先立ち、ジッドに脅迫状を送った「在郷軍人奉公会 *Légion Française des Combattants*」（訳語は「フランス戦士団」「フランス軍人同盟」とも）について触れておこう¹⁵⁾。同会は、前年（1940年）7月国家主席に就任したペタン元帥の奨励のもと、翌月末、反ユダヤ主義の政治家グザヴィエ・ヴァラのイニシアチブで発足した一種の御用団体で、第1次大戦の退役軍人、ついで若干の躊躇はあったものの39-40年の従軍経験者を糾合して結成された。そのうち、ニースを県庁所在地とするアルプ＝マリティーム県の奉公会は第1次大戦の英雄ジョゼフ・ダルナンの指揮に委ねられた。この組織の目的は「祖国を再興し雪辱を果たさんがため戦士を集めること」、すなわちペタンが唱道する「国民革命」の推進者を糾合することであったが、同年末、ペタンはその新たな任務として「我が輩が諸君に示す方針にしたがい新秩序の敵対者を告発せよ」と告諭する。この「新秩序の敵対者」としてペタンが名指したのは「ユダヤ人、コミュニスト、フリーメーソン」であった。ダルナンの古い戦友ブリュックベルジェ神父など一部にペタンの方針にたいし異を唱える者はあったものの、アルプ＝マリティーム県だけでもただちに5万人の退役軍人を集めた奉公会は、次第に対独協力に傾く（非占領地区の会員総数は海外県を含め120万を超えたという）。

この対独協力の姿勢は、国民革命の思想が盛り上がり欠き次第に色あせてゆくにつれ、いっそう鮮明なものとなる。奉公会の武力部門として設置され、41年末には非占領地区全域へと拡大する保安部隊（*Service d'Ordre Légionnaire*）、これを吸収するかたちで43年1月、対レジスタンス用に組織されたミリス（ペタンの承認のもととはいえ、すでに実権を掌握していた首相ピエール・ラヴァルが統率、ダルナンがその副官を務める）、同年夏結成の武装親衛隊（*Waffen-SS*、ダルナンがその司令官に任命される）へとつながる。そしてここでとりわけ留意すべきは、問題の奉公会支部を擁していたアルプ＝マリティーム県の政治的な位置づけであろう。ニースやその近郊は、パリから多くの作家や芸術家が避難・移住したことで早くから文化的な中心をなしていたが、県奉公会の統括責任者から、非占領地区全体のミリスの副官、さらに武装親衛隊の指令官へと昇進していったダルナンの経歴からも窺われるように、同県は政治的な面でも、政権本部の置かれたヴィシー、『フィガロ』や『ル・タン』などいくつかの有力紙が本拠をすえ情報の発信地であったリヨンと並ぶ重要な位置を占めていたのである。ちなみにヴィシー体制の4年間は、王党派の伝統的右翼が中心のペタン派が支配した権威主義的な第1期と、ラヴァル派が支配したドイツの衛星国としての疑似ファシズム的な第2期とに区分しうるが、第2期ばかりか、上述のように国民革命の抑圧的側面を背景にして、ジャン・ダルラン提督の第1期にすでに対独協力が推し進められていたことを見逃してはならない。今回の話題は、一部の奉公会会員による突出した行動ではあったものの、そのことを示す好例といえよう。

新聞・雑誌の反応

次いで新聞や雑誌の反応がどのようなものであったかについて——。ジッドは長年、情報収集サービス業者「アルゴス」に依頼して自身にかんする新聞・雑誌の切り抜きを収集していた。その結果として総数およそ3,500点の記事が20冊ほどの分厚いファイルに整理・分類され、現在はドゥーセ文庫に保管されている。同時代の反応・受容を伝えるにとどまらず、ほぼ確実にジッド自身が目を通したという意味でも貴重な資料であるが、このファイルの切り抜きを中心に当時のプレスの反応を一瞥しておきたい。というのは、先にも参照したオリヴィエ・フィリップナとパトリック・リーンハルトによる『ロジェ・ステファヌ』は、記事のいくつかを順不同に並べたうえで「新聞や雑誌はこのニース風サラダに様々な味付けをした」¹⁶⁾とだけ評しているが、記事を掲載順に、また占領地区か非占領地区かを考慮しながら通観すると、それとはまた別の様相が見えてくるからである。

未刊の日記にもあったように、当局は事件にかんする報道を即刻禁じた。この措置に従い、当初は地元『ル・プティ・ニソワ』と『レクレール』(ともに翌日報)に講演中止の事実が短く掲載されただけであった。また記事内容の制約ばかりか、報道そのものがアルプ＝マリタイム県内においても限定的だったことは、『レクレール』の当該報はニース版のみで、郡庁所在地グラスやカンヌなど南西部が対象のグラス版には掲載されていない点からも窺われる¹⁷⁾。

しかしながら現場に立ち会った聴衆をはじめ地元での反響・反発は予想以上に大きく、これに対し郷軍人奉公会は事態の収拾・沈静化を図る目的で26日、『レクレール』の「奉公会通信 Chronique de la Légion」にド・ティツソのジッド宛書簡を全文掲載、コメントを付して奉公会側の正当性を主張する(ただしこれもまたニース版のみの記事であって、情報が必要以上に拡散・伝播することは避けたいという意図が露わである)。とりわけ目をひくのは奉公会による事実の意図的な隠蔽・歪曲で、記事は「我々奉公会としては、アンドレ・ジッド氏の講演にかんして最近おこった一件にさほどの重要性は認めないが、一部の人々のあいだに若干の動揺が生じているので、ここに事の次第を明らかにする」と前置きし、ジッド宛書簡を引用したのち、平然として次のように結ぶのである——「アンドレ・ジッド氏は、我々の主張を容れて講演を行わず、またカンヌでの講演予定も取り消した。これにて一件落着」¹⁸⁾……。

だが事件そのものを速やかに葬り去らんとした奉公会の目論見は完全に裏目に出る。記事は逆にニースの騒動を広く全国に知らしめることになるのである。当時、占領地区と非占領地区のあいだでの手紙のやりとりは禁じられていたが、小荷物の郵送は認められており、それなりの制約はあったが相手地区でのプレス情報はおおむね入手が可能であった。かくして「奉公会通信」の内容は、非占領地区内のみならず、数日のうちには占領地区にも伝わり、当然ながら各紙誌において報告・論評の対象となったのである¹⁹⁾。

まずパリの対独協力紙『ルーヴル』(ロベール・ポパンの署名記事)は5月31日号で、ジッド擁護の意図はまったくないと述べつつも、むしろ当局の事前許可にもかかわらず奉公会が講演を妨害した点を取りあげ、「奉公会」=『アクション・フランセーズ』に毒された、いわゆる「自

由地区」のほうこそ政治的な圧政が強く、自由がないと非難する。

リオンで印刷されていた週刊の『セット・ジュール』は非占領地区でほとんど唯一事件を報じたメディアだが、その6月1日号掲載の記事（ドゥーセ文庫所蔵の切り抜きにはジッドの自筆で出典・日付が書かれている）はかなりグロテスクなものと言えよう。奉公会の名を挙げることはせず、「様々な愛国者組織が、『背徳者』と同性愛弁護の書『コリドン』の著者であり、かつての熱狂的な Kommunismus 支持者の講演に抗議しようとしていた」と述べたうえで、次のように素っ気なく結んでいる——「ジッド氏は〈フランス人統合の支持者〉として、純粹かつ単純に一連の講演を取り止めた。8,000フランにのぼる興行収益は返却された」。

これ以後はもっぱらパリの対独協力紙による報道が続く。まずは『ラ・ジェルブ』が6月5日号で、ジッドの作品はさほど偉大でもなく雄々しいものでもないのに、その名声と権威は汎ヨーロッパ的に大きい、それだけに、奉公会が講演を禁じたのは新生フランスに倫理的イメージを付与するものだと論じている。

これにつぎ極右系新聞『ラベル』は6月12日、卑語や俗語をちりばめた記事のなかで、ユダヤの擁護者ジッドが妥当なる衛生的措置によって講演を禁じられたが、そのことを嘆く馬鹿者どもがいると口汚く罵り、すでに死んだも同然のこの作家をありがたがる非占領地区の共和派もまた同じく死臭を放っていると難じている。「口から糞を吐く輩ども」などといった過激な表現は、まるでセリーヌの『バガテル』を読んでいるかのようだ。

また『ラサンブルマン』は6月15日、奉公会の行動を批判した同僚紙『ルーヴル』の記事をおそらくは念頭におき、その修正を試みている。『ラサンブルマン』によれば、ジッドは Kommunismus として祖国に甚大なる悪影響を及ぼした人物であるだけに、奉公会の取った行動には十分に汲むべきものがある。ジッドの才能は認めつつも、彼が今後もフランスの青年層を害しつづけるならば、断固として否と叫ばねばならない。惜しむべきは、奉公会が講演禁止の決定を最後まで貫かなかったことである、と。

そして極右紙として名高い『ジュ・スエイ・パルトウ』の6月23日号に寄稿したドリュ・ラ・ロシュルは、『新フランス評論』誌との絶縁を表明したばかりのジッドにたいし、抑えた筆致ながら対独協力の理を説いている。すなわち、かつてモスクワを訪れたジッドが今度はパリを訪れ、「古き国家主義、古き社会主義の欠陥を免れた国家社会主義」の建設がこの地でいかに準備されているかを、彼自身の目で見てもらいたいものだ、と。

以上のように報道はほとんどがパリの対独協力紙によるもので、非占領地区での報道は少なく、あってもけっして好意的なものではなかった。特に地元ニースの各紙は一貫して沈黙を守っている。さて続いては、『レクレール』に「奉公会通信」が掲載された時点に遡って、ジッド自身の対応を『フィガロ』とのやりとりを中心に見ていくことにしよう。

『フィガロ』とのやりとり

論述の錯綜を避けるため未刊日記の紹介のさいには言及・引用を控えたが、「奉公会通信」に

関連してジッドは記事掲載の翌日（5月27日）、補足のメモとして奉公会が事実を歪曲したことへの反発を次のように書き付けていた——「じじつ『レクレール』の〈奉公会通信〉はノエル・ド・ティツの手紙を全文掲載したうえで、〈アンドレ・ジッド氏は、我々の主張を容れて講演を行わなかった〉と書いている。彼らの非難にたいし私が全面的に同意したと認めさせようとする書き方だ。これを読めば、憤慨した会員がさらに新たに退会を申し出ることだろう」。

この補足メモと同様、明らかに「奉公会通信」に触発されてジッドは同じ27日、カプリスから『フィガロ』の主筆ピエール・プリソンに宛て長い手紙を送ることになる。ちなみにこの手紙は昨年11月、パリのドゥルオ会館で競売に付されたもので、先買権を行使したドゥーセ文庫の所蔵するところとなった。封筒は保存されておらず、書状じたいにも名宛人は明記されていないため、高名な自筆稿専門家が作成した競売カタログでは『フィガロ』の文芸記者モーリス・ノエルに宛てた書簡であると注記されていた（後述のようにプリソンから手紙を託され、ヴィシー当局との交渉にあたったノエルが以後も自身で保管していたことによる混同）²⁰。だが実際の受け手がプリソンだったことは、やはりドゥーセ文庫現蔵（ジッドの遺贈）の同者宛下書きとの記述内容の一致から疑問の余地はない²¹。入念な推敲の跡をとどめるこの下書きの存在は、作家が書簡の重要性を認識していた動かしがたい証左でもある。

手紙は便箋6枚からなるかなりの長文で、内容としては、講演の原稿が当局の検閲であらかじめ承認されていたことや、在郷軍人奉公会がジッドの態度次第では講演を妨害する用意があると告げていたこと、また同会幹部とのやりとりや、ジッドが会場で読み上げたスピーチの転写など、未刊の日記と重複する部分が多いが、ここでは日記にはない記述について簡略に紹介しておきたい。当然のことながら、それは主として『フィガロ』にたいする依頼・要請の部分であって、ジッドはまず手紙の冒頭では次のように書いている——

拝略。私のカンヌ講演を企画していたヴィクトル・グランピエール氏からの手紙で、彼がアンドレ・ヴァルノ氏から電報を受けたこと、それによれば、ニースで予定されていた私の講演を妨害した最近の事件にかんし『フィガロ』がなにがしかの情報を望んでおられることを知りました。貴紙のご関心はよく分かります。というのもこの事件は、私という個人を超えて〈悪しき師〉論争、貴誌に寄稿しておられる方々（とりわけアンドレ・ルソー）がこれまでも実に熱心に関わってこられた〈悪しき師〉論争に連なるものだからです。²²

文中に登場する人名について補足しておこう。カンヌ講演の企画者だったヴィクトル・グランピエールは、ディオールの香水瓶をデザインしたことで知られる装飾美術家。いっぽう彼に電報を打ったアンドレ・ヴァルノは作家・美術評論家で、当時はリヨンに滞在していた『フィガロ』の定期的な寄稿者。同じ美術関係ということで『フィガロ』の依頼を受けてグランピエールにコンタクトをとったものと思われる。アンドレ・ルソーも、やはり当時はリヨンに滞在していた文芸評論家で、『フィガロ』の中心的な寄稿者のひとり。このルソーが深く関わっていた「〈悪しき師〉論争」とは、一言でいえばフランスの敗北・分裂を招いた、あるいはペタンの国民革命に支障を

きたすという理由による、一部の文学者・思想家にたいする保守・カトリック陣営からの非難・攻撃と、それにたいする反対派の擁護を指す。まさにジッド自身はアンリ・マシスらモーラス主義者たちの格好の標的であった。むろんルソーはジッド擁護派である。なお『フィガロ』の取材活動については、時間的なインターバルから見て、前日の『レクレール』の記事に触発されて始まったものとは考えにくい。後述するようにカンヌ講演にかんし誤報を出すという不始末を契機に、それ以前からすでにカンヌ側に接触していたものと推測される。

書簡の紹介に戻ろう——。ジッドは、『レクレール』掲載の「奉公会通信」では在郷軍人奉公会の立場を正当化するため、講演妨害の方針を最終的には撤回した点が意図的に隠蔽され、また聴衆の激しい憤慨についてもまったく触れられていないことを強調したうえで、『フィガロ』には細心の注意のもとに事件に関心を示して欲しい旨を次のように綴っている——

アルプ＝マリティーム県の奉公会が上層部の叱責を受けたことについて私自身は何も承知していないと見なされています。また貴紙『フィガロ』がこの事件を報じるとしても、きわめて強大な力を持ち、自らもそのことを示威したいと思っている組織の怒りを買わぬよう、くれぐれも注意を払っていただきたい。ご存じのように〈悪しき師〉論争ははまだ沈静化してはおりません。『フィガロ』が私からの情報をどのように利用すべきか、またどのように利用できるかはさておいても、少なくとも貴方に近い寄稿者の方々にはこの情報をご承知おきいただきたいのです。敬具。

なおジッドの手紙には次の3つの文書・資料が添えられていた。すなわち第1は、『レクレール』の編集者ジャン・ルイヨがピエール・ブリソンに宛てた手紙。第2は、問題の「奉公会通信」の切り抜き。そして第3が、ジッドが講演会場でしたスピーチの写し（ルイヨの手書き）である。このうちルイヨのブリソン宛書簡は、前日の5月26日、すなわち『レクレール』に「奉公会通信」が掲載された当日のもので、ジッドが同紙編集部にたいし迅速に接触・依頼したことを裏付ける。その全文を紹介すると——

拝略。同封申しあげる2点の資料は、アンドレ・ジッド氏が詩人のアンリ・ミショーについてニュースおよびカンヌで行う予定でしたが、奉公会によって中止を求められた講演にかんするものです。この問題について当局の検閲は、〔ジャーナリズムが〕政治的に関与することを望んでおりません。しかしながら私としてはこれらの資料は貴紙の文芸部門の関心を惹きうるものと存じます。敬具。²³⁾

この手紙からは、『レクレール』と、同紙に常設の通信欄をもつ奉公会との微妙な関係を読みとることができる。すなわち奉公会はベタン政権の強力な御用団体として、いわば政治的強制力をもってプロパガンダ用の通信欄を掲載させているのであって、『レクレール』としてはけっしてこれに満足しているわけではないのである。ルイヨの手紙は、ジャーナリズムとしてのせめ

ても抵抗の証と言えようし、また、お互い当局の検閲に苦慮する者として同業紙の理解を求める態度表明でもあろう。

ジッドの手紙と関連資料を受けとった『フィガロ』のプリソンはさほど日を置かずジッドに返書を送っている（ドゥーセ文庫所蔵未刊書簡、封筒は保存されておらず。ジッドはこの書簡を5月31日にマリア・ヴァン・リセルベルグに見せているので²⁴⁾、遅くとも30日までには投函されたもの）。これも短いものなので全文を紹介しよう――

拝略。明日、貴方のお手紙を持たせてモーリス・ノエルをヴィシーに遣り、奉公会の会長ロール将軍に、この事件の醜悪さ、またかかる愚行が当然のことにまかり通ることの危うさに注意を促します。検閲の指示によって講演については記事にすることが禁じられていました。まさにそのために私自身も警告を受けました。私としてはこの禁令が解かれるように求める所存、そのことについては追ってお知らせします。

玉稿を鶴首してお待ち申しあげます。敬具。²⁵⁾

文中、プリソン自身もすでに「警告を受けた」とあるのは、ニュースの一件を受けカンヌ講演もまた中止が決定していたが、『フィガロ』はこの変更事実を承知せず、まさに講演が予定されていた当日、ジッド歓迎・賞賛の記事を掲げるといふ不始末を犯していたためであろう²⁶⁾。

さて、プリソン書簡とほぼ同時期（5月30日）、ジッドはミショーに宛てた手紙（現存が確認された唯一のジッド書簡）で、講演テキストの出版への同意を求めるが、その話に先立ち、気軽な口調で事件に触れている――「あの記憶すべき催しについてなにがしかの噂が貴方の耳にも入っていることでしょう。翌日には160人の奉公会会員が退会したのです！ まったく愉快的な経験でした！」²⁷⁾。しかしながら、こういった精神状態はさほど長くは続かない。すでに見たようにジッドにたいし非好意的な報道が続くなか、6月14日の『日記』には悲観的な記述が現れる――

奉公会の犠牲になるのはかまわない。だが、こんなつまらないことで犠牲になるのは嫌だ。私が喋るのをやめたのは、ド・ティッソ氏の脅迫状によるというよりは、むしろ私の講演がくだらないものだからだ。大したことでもないことを言うために、こうした脅迫に挑戦するなんて！ そんなことをする必要はない……。私ははじめ、抗議の意味で〈続々と〉徽章を返上する会員がいるのを見て〔…〕喜んだものだった。しかし、この小さな事件については今日、〈世論〉のなかには次のことしか残っていない。つまり彼らは私に喋ることを禁じた、そして私は、新聞の報じたとおり〈自分の間違いを認め、彼らの道理に屈して〉沈黙した、というものだ。事態を明らかにすることができたかも知れない文章はすべて検閲によって発表を禁止されてしまった。²⁸⁾

自嘲的な厭世感の発露とも見なせる一節であるが、最終文を見るかぎり、この日記をつけた時点ではジッドは頼みとする『フィガロ』がヴィシー当局の説得工作に失敗したと思っていたのはま

ジッドの『アンリ・ミショーを発見しよう』

ず間違いあるまい。

だが、まさに同じ6月14日発行の『フィガロ』にジッド援護の記事が載るのである²⁹⁾。「訂正を要す」と題された記事の主要部分はほとんどがジッドからの情報を要約したものであるが、まずはそれに先立つ導入部分——「パリで印刷される新聞各紙は驚き、眉をひそめている。詩人アンリ・ミショーにかんするアンドレ・ジッド氏の講演はどうやらニースで禁止処分を受けたらしい、と。そんな風に伝えられるとこのニュースはまったく正確さを欠くものになってしまう」。次いで記事は、奉公会が講演当日、脅迫状を送ったこと、その後態度を翻し講演を許可したが、ジッド自身がこの不当な提案を拒否し、会場で聴衆にその旨を告げると割れるような喝采がおきたこと、などを報じたあと次のように結んでいる——「蓋をして報じないでも悪くはないような事件ではある。だが現にパリで流布している情報は、誤ったものである以上、きちんと正しておく必要があったのだ。ジッドの名がフランス文学の威光のひとつを担っているようなあらゆる国々で、ついにフランスは知的生活にかんし、ニースの脅迫状送付者が示したような最低のレベルにまで落ちてしまった、そう見なされることになれば、我々にとって誇るべき事態とはいえない」。

記事の内容から見て、『フィガロ』が遅ればせながらも事件を具体的に報じる許可、しかも批判を交えて報じる許可を当局から得ていたことは疑えない。じっさい翌15日、プリソンはジッドに宛て次のような手紙を送っている——

拝略。昨日「フィガロ・リテレール」でお読みになったコラムこそは、半ばながらではあれ、ここ2週間ほどの戦い、粘り強い裏交渉によって得られた勝利です。講演中止事件が、奉公会について報じたある調査記事の掲載と折悪しく重なってしまっただけに³⁰⁾、そしてその記事の文面変更はいっさい禁じられていただけに、私としてはこの勝利をいっそうのこと強く望んでおりました。それにしても検閲は万事につけ一段と厳しさを増しています。戦いを諦めぬよう気力をふりしぼらなければなりません。敬具。³¹⁾

『フィガロ』の好意的な記事とならんで、プリソンの手紙はジッドを勇気づけたに相違ない。じつ、これ以後は「くだらない講演」などといった自嘲的発言は消え、講演テキストの出版計画も順調に進展しはじめる。ジッドは事件直後からガストン・ガリマールとの話し合いで、刊本は若者たちが求めやすい定価10フランの普及版だけとし、印刷は非占領地区内でおこなうと決めていたが³²⁾、その予定どおり『アンリ・ミショーを発見しよう』は1941年7月、ミディ＝ピレネーのカオールで普通紙のみが刷られ、まもなく出来の運びとなるのである。

結 語

では、公刊されたこの講演テキストの作品としての完成度はどうなのか。ジッド自身は刊本冒頭に添えた前書きで次のように述べている——「この講演用の小文は、聞いていただくために書

かれたもので、読んでいただくためのものではなかった。(だから聞き易くするために或る種の気さくな調子で書かれているが、それがこうして読まれる時には、嘆かわしいことにぞんざいな書きぶりに思われてしまう)。もしも予告されていたとおり5月21日に演説することが私に許されていたならば、これを印刷させようなどとは夢にも思わなかったことだろう³³⁾。まさに然り、というのが筆者の率直な感想である。ジッドはこの講演を当初から「朗読をまじえた談話」と呼んでいたが、ミショーが大詩人としての地位を獲得し、その詩句が公認の参照対象となった後では、刊本のなかでの長々とした引用の頻出は、時としてテキスト全体の緊密な構成を損なってはいるまいだろうか。たとえば1900年ブリュッセルでの講演『文学における影響について』や、1922年ヴィユエ・コロンビエ座でのドストエフスキーにかんする連続講演を傍らにおいて比べるならば、なおさらのことそういった感が強い。いっぽう当時の反応・受容に話をかぎっても、この小冊子じたいは、2年後フランシス・ポンジュの『物の味方』にかんしサルトルの論文が巻き起こしたほどの大きな反響を呼んだわけではない。さらに言えば、ニース講演中止をめぐる騒動はミショーの名を一般のあいだに広めはしたが、必ずしもそれによって人々がただちに詩人の作品に手をのばしたわけではなかったのである。

しかしながらジッドの名とミショーの名が結ばれたことの意味はけっして小さくない。すでに久しく前からジッドはひとつの確固たる規範だったからである。「最重要の同時代人」とは、作家であり画家であるアンドレ・ルーヴェールがジッドを評して用いた表現だが、この「最重要の同時代人」が己の注目するところを公にしたことで、ミショーを熱烈に愛する読者の層は徐々にではあるが確実に広がっていったのである。ジッドの支援に感謝したミショーは、フランス解放後の1945年、ガリマルから上梓した詩集『試練・悪魔祓い』を次のような自筆献辞を添えて贈っている——「誰もが人の支えをひどく欠いていたあの年、この私にかくも温かく手をさしのべてくれたアンドレ・ジッドに」³⁴⁾。

註

- 1) Henri Michaux, « Hommage », in *Colpach*, vol. h. c. publié par les Amis de Colpach, Luxembourg, 1957, p. 53 (nouvelle éd. augmentée en 1978, p. 185).
- 2) Lettre d'André Gide à Louis Ducreux, du 12 juin 1933, partiellement reproduite dans le *Bulletin des Amis d'André Gide*, n° 98, avril 1993, p. 358.
- 3) Maria Van Rysselberghe, *Les Cahiers de la Petite Dame. Notes pour l'histoire authentique d'André Gide 1918-1951*. Préface d'André Malraux, Paris : Gallimard, 1973-77 (*Cahiers André Gide* 4-7), t. II, p. 446.
- 4) *Ibid.*, t. III, p. 14.
- 5) *Ibid.*, pp. 216-217.
- 6) Voir la lettre d'Henri Michaux à André Gide, s. d. [début 1941], reproduite par Jean-Pierre Martin, « Gide lecteur de Michaux », *Bulletin des Amis d'André Gide*, n° 105, janvier 1995, pp. 73-74.
- 7) Voir Roger Stéphane, *Chaque homme est lié au monde*, Paris : Éd. du Sagittaire, 1946, pp. 63-64 et 285-286 ; *Toutes choses ont leur saison*, Paris : Fayard, 1979, pp. 135-137 et 331-332 ; *Tout est bien*, Paris :

ジッドの『アンリ・ミショーを発見しよう』

- Quai Voltaire, 1989, pp. 159-160. Voir aussi Olivier Philipponnat et Patrick Lienhardt, *Roger Stéphane. Enquête sur l'aventurier*, Paris : Grasset, 2004, pp. 173-180.
- 8) Voir André Gide, *Journal, II (1926-1950)*. Édition établie, présentée et annotée par Martine Sagaert, Paris : Gallimard, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », 1997.
 - 9) ちなみにジッドに手紙を送ったノエル・ド・ティッソ (1914年生まれ) はこれ以後, 典型的なナチス・コラボとしてユダヤ人迫害やレジスタンス弾圧に積極的に加担, 最後はフランス武装親衛隊の突撃部隊長として対ソ連戦に参加し, 1944年の夏, 旧ポーランド領ガリツィアで戦死した。
 - 10) Roger Stéphane, *Chaque homme est lié au monde*, op. cit., p. 64.
 - 11) ジッド存命中に出版された当該時期の『日記』とは以下の各版である—— *Pages de Journal 1939-1942*. Edited by Jacques Schffrin, New York : Pantheon Books, 1944 ; *Pages de Journal 1939-1941*, Alger : Charlot, 1944 ; *Pages de Journal 1939-1941 (mai 1942)*, Yverdon et Lausanne : Éd. du Haut-Pays, 1945 ; *Journal 1939-1942*, Paris : Gallimard, 1946.
 - 12) Voir Olivier Philipponnat et Patrick Lienhardt, *Roger Stéphane. Enquête sur l'aventurier*, op. cit., p. 180.
 - 13) Voir Maria Van Rysselberghe, *Les Cahiers de la Petite Dame*, op. cit., t. III, p. 245.
 - 14) André Gide - Roger Martin du Gard, *Correspondance 1913-1951*. Introduction par Jean Delay, Paris : Gallimard, 1968, t. II, p. 234.
 - 15) 本節の論述は以下の各著に負うところが大きい—— Pascal Fouché, *L'Édition française sous l'Occupation, 1940-1944*, 2 vol., Paris : Bibliothèque de Littérature française contemporaine de l'Université Paris 7, 1987 ; Olivier Philipponnat et Patrick Lienhardt, *Roger Stéphane. Enquête sur l'aventurier*, op. cit., p. 176 ; 渡辺和行『ナチ占領下のフランス——沈黙・抵抗・協力』, 講談社選書メチエ 34, 1994年 ; 川上勉『ヴィシー政府と「国民革命」』, 藤原書店, 2001年。
 - 16) Roger Stéphane. *Enquête sur l'aventurier*, ibid., p. 179.
 - 17) Voir *L'Éclaireur de Nice et du Sud-Est*, 22 mai 1941 (éd. de Nice). 正式名称が謳うように同紙はニースを中心にフランス南東部 (実質的にはアルプ＝マリタイム県) をその販売エリアとしていた。ちなみにパリのフランス国立図書館が現蔵するのは県南西部を対象とするグラス版 (それに先立ってはカンヌ・アンティーブ・グラス版と称した) のほうである。
 - 18) *L'Éclaireur de Nice et du Sud-Est*, 26 mai 1941 (éd. de Nice). 強調は原文どおり。
 - 19) 事件を報じた紙誌のうち, 以下で言及するものの出典は次のとおり—— *L'Œuvre* (art. signé de Robert Bobin), 31 mai, « La “Légion” de Vichy s'arroge en zone non occupée de singuliers droits de censure littéraire » ; *Sept Jours*, 1^{er} juin, « André Gide n'a pas pu lancer un poète » ; *La Gerbe*, 5 juin ; *L'Appel*, 12 juin, « Le Gide et son... Michaux » ; *Rassemblement*, 15 juin, « Plaindre Gide ? S'agit de s'entendre... » ; *Je suis Partout* (art. signé de Pierre Drieu la Rochelle), 23 juin, « Ils n'ont rien oublié ni rien appris ». なお非占領地区での報道が比較的容易にパリに伝わっていた点については, 一例として, 当時ポール・レオトーが『フィガロ』をはじめとする新聞・雑誌の切り抜きをしばしば知人から郵便で受けとっていたことを挙げておこう (voir Paul Léautaud, *Journal littéraire*, nouvelle éd., t. III, Paris : Mercure de France, 1987, pp. 341, 347, 379, 413 etc.)。
 - 20) Voir le catalogue de la vente des 20-21 novembre 2007 à Drouot-Richelieu, Paris : Piasa, item n° 236. ノエル旧蔵アルシヴからの出品物を数多く収めたこの競売カタログには, 当該書簡とならんでジッドのノエル宛書簡12通も記載されている (item n° 235)。なお付言すれば, ノエルはプリソンの信任が厚かった敏腕記者で, 戦後は『フィガロ』の文芸欄を基に創刊された週刊紙『フィガロ・リテレル』の編集長に就任している (voir Pierre Brisson, *Vingt ans de « Figaro », 1938-1958*, Paris : Gallimard, 1959, pp. 41, 54 et 186-188)。またプリソンの経歴や活動などの詳細については同書のほか以下を参照—— André Lang, *Pierre Brisson : le journaliste, l'écrivain, l'homme (1896-1964)*, Paris : Calmann-Lévy, 1967 ;

- Jean-François Brisson, *Fils de quelqu'un. Pierre Brisson et les "trente glorieuses" du « Figaro »*, Paris : Éd. de Fallois, 1990 ; Raymond Aron, *Mémoires. 50 ans de réflexion politique*, Paris : Julliard, 1983.
- 21) Voir le brouillon (très raturé) d'une lettre d'André Gide à Pierre Brisson, s. d. [26 ou 27 mai 1941], BLJD γ 133-11, 6 ff. formats divers, écrites au recto seulement (6 pp.) à l'encre noire. Cf. note suivante. この下書きに日付の記入はないが、第1葉冒頭に「P・ブリソン宛書簡」というジッド自筆の備忘がある。
 - 22) Lettre d'André Gide à Pierre Brisson, du 27 mai 1941, intégralement reproduite *infra* « Appendices ».
 - 23) Lettre inédite de Jean Rouillot à Pierre Brisson, du 26 mai 1941, BLJD Ms. ms 50958 (7), 1 carton bristol 106 x 137 mm (en-tête impr. « L'Éclaireur de Nice et du Sud-Est / Rédaction »), écrit recto verso (2 pp.) à l'encre noire, sans enveloppe conservée.
 - 24) Voir Maria Van Rysselberghe, *Les Cahiers de la Petite Dame*, op. cit., t. III, p. 248.
 - 25) Lettre de Pierre Brisson à André Gide, s. d. [fin mai 1941], intégralement reproduite *infra* « Appendices ».
 - 26) Voir l'article paru dans *Le Figaro (littéraire)* du 24 mai 1941 : « M. André Gide derrière le tapis vert ».
 - 27) Lettre d'André Gide à Henri Michaux, du 30 mai 1941, reproduite dans le catalogue de la vente de la *Bibliothèque littéraire Gwenn-Aël Bolloré*, Paris : Sotheby's France, 12 février 2002, item n° 70, fac-similés.
 - 28) André Gide, *Journal, II (1926-1950)*, op. cit., p. 764.
 - 29) *Le Figaro (littéraire)*, 14 juin 1941, « Il faut rectifier... », art. non signé. ちなみに当時『フィガロ』（4頁建、毎土曜日に2頁の文芸欄「フィガロ・リテレル」を掲載）の発行部数はわずか数千部で（たびかさなる検閲の強化に抗議して同紙が休刊を決定した翌年末の時点では約8,000部。Voir Pierre Brisson, *Vingt ans de « Figaro », 1938-1958*, op. cit., p. 34）、基本的には定期購読者が対象であった。同紙がアルプ＝マリティーム県の読者のもとに郵送で届くのはおそらくは発行の翌日で、ジッドが明らかにこの擁護記事を14日当日には読んでいなかったのもそのためと推測される。じじつ、ひとつのサンプルとして当時ニース在住のマルタン・デュ・ガールの日記を調べてみても、そこには「昨日の『フィガロ』によると」に類する表現はあっても、「今日の『フィガロ』」といった記述は一件も見あたらない（voir Roger Martin du Gard, *Journal*, t. III, Paris : Gallimard, 1993, pp. 399, 513, 524, 527, etc.）。
 - 30) 5月31日から6月4日まで4回にわたり掲載されたルイ・ガブリエル＝ロピネによるルポルタージュ「在郷軍人奉公会のベレーを被って」（« Sous le béret de la Légion », art. signé de Louis Gabriel-Robinet, *Le Figaro*, 31 mai et 2-4 juin 1941）のことを指す。
 - 31) Lettre de Pierre Brisson à André Gide, du 15 juin 1941, intégralement reproduite *infra* « Appendices ».
 - 32) Voir André Gide - Roger Martin du Gard, *Correspondance 1913-1951*, op. cit., t. II, p. 233 (lettre de Gide, du 2 juin 1941). ただし、このマルタン・デュ・ガール宛書簡のなかでジッドが言及する「行われずに終わった5月21日のニース講演」という副題は実際の刊本には付されなかった（次註参照）。
 - 33) André Gide, *Découvrons Henri Michaux*, Paris : Gallimard, 1941, p. 7 (repris dans : André Gide, *Essais critiques*. Édition présentée, établie et annotée par Pierre Masson, Paris : Gallimard, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », 1999, p. 733).
 - 34) Cité par Pierre Masson, in André Gide, *Essais critiques*, *ibid.*, p. 1192.

*）本稿は、2008年5月17日、京都大学フランス語学フランス文学研究会の年次総会（於・京大会館）でおこなった「特別講演」の内容をまとめたものである。

Appendices :

FRAGMENT INÉDIT DU JOURNAL D'ANDRÉ GIDE

23 Mai [1941]

Installé depuis quelques jours chez Marc dans le charmant cottage qu'il a loué pour l'été, petite annexe du Château de l'Horizon, cette vaste demeure au faste discret, où Maxine Elliot avait coutume de recevoir l'ex-prince de Galles et Churchill[,] parmi joyeuse et jeune compagnie. Le « château » même reste inoccupé depuis la mort de Maxine Elliot. Marc a la jouissance du merveilleux jardin qui borde la mer, et de la grande piscine qui permet de se baigner même lorsque la mer serait trop froide. Encore que très près de Cannes, la difficulté des communications fait que l'on se sent, ici, fort à l'abri des importuns.

Je m'étais laissé entraîner à promettre [à] une conférence. [Stéphane] Roger Stéphane avait organisé cela avec un grand zèle. Auric avait ouvert la série et je m'étais donc engagé à faire, le mercredi suivant (c'était avant-hier) une « causerie-lecture » sur Henri Michaux. Dans la matinée de ce jour, un coup de téléphone de Stéphane m'avisait d'une lettre à mon adresse, parvenue à l'Hôtel Ruhl (c'est dans le grand hall de cet hôtel que je devais [faire ma lecture] <parler>). Stéphane avait fort bien fait de prendre connaissance de cette lettre ; elle émanait d'un des chefs de la Légion qui, en termes ironiquement déférents [*sic*], m'avertissait : la Légion saurait m'empêcher de parler dans le cas où je n'aurais pas « le tact et l'intelligence » de comprendre de moi-même que le mauvais maître que j'avais été, chargé des lourdes responsabilités d'avoir, par ma néfaste influence, grandement contribué à la démoralisation de la jeunesse et, partant, à notre défaite, n'avait rien de mieux à faire désormais qu'à se taire et à cuver dans l'ombre sa honte et son déshonneur. Tout cela [était] dit en termes pesés et savamment injurieux. [La] (v. ci-contre le texte de cette lettre)

Avec en-tête de Légion Française des Combattants.

11 rue Alexandre-Mari - Nice

Union départementale des Alpes Mar^{it} -

PROPAGANDE.

21 Mai [19]41.

(texte dactylographié)

Monsieur

L'annonce de votre conférence nous a beaucoup surpris. La qualité de votre talent nous autorisait à croire que vous ne manqueriez pas de tact à ce point.

Nous savions l'auteur de « l'Immoraliste » et des « Nourritures Terrestres » assez opportuniste et assez philosophe pour venir se reposer en toute quiétude des fatigues [dans] de la guerre dans un quelconque hôtel de la Côte d'Azur. Et croyez bien que nous n'aurions pas perdu notre temps à troubler la retraite du Maître. Mais il est un peu choquant de voir André Gide affronter le public français en ce mois de Mai 1941, en dépit d'une actualité qui condamne son œuvre beaucoup mieux que n'importe quelle critique.

On parle beaucoup des responsables, en ce moment. C'est une mode imposée par les circonstances. Permettez-nous de vous en parler un peu.

Les domaines où vous avez exercé votre activité sont précisément ceux dans lesquels l'impunité reste malgré tout un privilège intangible. Les écrivains peuvent sans crainte allumer dans les esprits et dans les cœurs de dangereux incendies : Ils savent bien que ce n'est pas à eux que reviendra le soin de les éteindre.

C'est en effet à votre œuvre littéraire que nous voulons faire allusion. Votre personnalité politique fut trop pâle et surtout trop indécise pour que nous y puissions songer avec une rancœur sérieuse. Et puis la politique est à nos yeux un de ces vilains péchés d'autrefois dont nous ne voulons même plus nous occuper. La politique ne nous intéresse pas.

Par contre, il est difficilement admissible, à l'heure où le Maréchal veut développer chez la [j]>eunesse Française l'esprit de sacrifice, de voir monter à la tribune un des hommes qui s'est fait le champion triomphant de l'esprit de jouissance.

Les refrains de Nathanaël ont dû peser aussi lourd dans la balance que bien des complots politiques. Alors, Monsieur Gide, nous vous en prions, que Nathanaël se fasse oublier, lui et toute sa famille. C'est presque une question de goût... j'allais dire, d'intelligence...

Ce dernier mot nous est aussi cher qu'à vous-même. Mais nous ne croyons pas le déshonorer en lui adjoignant, avec une certaine intransige[nce]ance en accord avec l'époque, l'épithète de « Française ». Vous auriez tort de voir dans cette lettre les protestations un peu naïves de barbares trop zélés. On peut repousser Nathanaël et tout ce qui l'entoure sans être pour cela un [p]<P>hilistin. On peut aussi « obliger » les gens à comprendre s'ils montrent, en ne changeant rien à leur conduite, qu'ils ne veulent pas comprendre. Et on peut faire cela avec beaucoup de fermeté sans être non plus un Philistin.

En espérant que ce rappel à l'ordre, au bon goût, au tact, sera entendu,

Veuillez agréer l'expression de nos sentiments distingués

pour

(sur un timbre) : « Légion Française des Combattants » Alpes M^a

(signé) :

N[oël] de Tissot.

Vers les six heures du soir (la conférence devait avoir lieu à 9 heures) [nous nous] <je re>trouv[ions]<ai> [assemb] groupés, dans le Bar du Rhül [*sic, pour Ruhl*], Martin du Gard, Marcel Achard, Stéphane, et Malraux (prévenu téléphoniquement par Roger M. du G.) en assemblée consultative. L'opinion très nette de Malraux était que, la Légion ayant pour elle la force de ses très nombreux membres alertés et l'assentiment, la protection et l'appui [de] (je devrais dire [en un mot] : la connivence) de la police, il n'était pas prudent de rien tenter à son encontre. [Le mieux était de] <Il n'y avait qu'à> filer doux[, en cherchant]<.> Rien à chercher,<,> que le moyen de sauver la face.

Cependant Marc Allégret, de son côté, entrait en rapports avec un des chefs de la Légion, M^r Acqua Viva et, après de longs pourparlers, vint nous apprendre que, tout bien considéré, la Légion levait le veto (notons que le texte de ma conférence, soumis à la censure, avait reçu <préalablement> l'approbation) [et consentait à me laisser parler]. [Ordre serait <sera ajouté en choix et non biffé> donné aux Légionnaires de ne point manifester] <Marc Allégret eut la présence d'esprit de demander : – Désavouez-vous la lettre insultante ? En retirez-vous les accusations ? – Nullement. Simplement nous laisserons parler Monsieur Gide ; [et] même> se tenir tranquilles [*non biffé*].

[Je me sentis un peu volé : des manifestations hostiles ne m'auraient pas déplu, car je gardais la certitude de devoir être chaleureusement défendu.]

Mille grâces, Messieurs [la Le] de la Légion [,] <!> mais je préférerais de beaucoup votre interdit, à votre condescendance. Après cette grossière insulte, vais-je devoir vous remercier de me permettre tout de même de parler ? L'autorisation de la censure me suffisait ; je n'ai que faire de la vôtre. [Ne retirez pas vos menaces, je vous en prie. C'est au contraire moi qui me retire devant elles] <Je me retire devant vous> et vous laissez [de grand cœur] les tristes lauriers de cette victoire [de la force sur l'esprit.] [Vous le vouliez : je ne parlerai pas.] [Et] <Mais> l'auditoire, venu pour m'écouter, saura [que c'est à vous qu'il doit] <les raisons de> mon silence.

Cet auditoire était nombreux ; plus nombreux et plus chaleureux que je [n']<n'étais en droit d'>espér[ai]<er>. [Toutes les chaises étaient prises et n]<N>ombre de personnes, qui n'avaient trouvé où s'asseoir tapissaient le fond de la grande salle. Encore que les Légionnaires commandés se fussent, sur dernier mot d'ordre, [abstenus de paraître] <retirés>, on avait [dù] refus[er]<é> du monde. Quand je parus sous l'estrade, les applaudissements éclatèrent, si prolongés que je dus faire geste de les interrompre. Dans le complet et les chaussures que Marc m'avait prêtés, qui m'allaient bien, je me sentais parfaitement à mon aise ; à la fois calme et exalté ; au surplus violemment amusé ; et c'est d'une voix assurée et vibrante, [très] [que je sentais bien timbrée et partant jusqu'au fond de la salle,] que, debout, penché <en avant> sur la table [qui se trouvait] à l'extrémité de l'estrade, je lus et récitai cette courte harengue [sic] que j'avais entre-temps préparée.

« Messieurs

Pas de discorde entre les Français. Tel est le mot d'ordre qui me domine.

Cet après-midi, l'on m'a remis une lettre comminatoire de la Légion.

Il m'importe peu que ceux de la Légion se méprennent sur ma personne, mon œuvre et mon action. L'amour-propre, ici, n'est pas de mise.

J'apprends au dernier moment que la Légion consentirait pourtant à me laisser parler. Mais mon point de vue reste le même : pas de discorde entre les Français ; plutôt que de fournir prétexte à des dissensions (encore que cette conférence fût autorisée par la censure, les autorités civiles et militaires) taisons-nous.

Tant qu'il s'agit d'art, je suis encore prêt à la lutte. Mais j'ai trop grand souci des intérêts de la France pour en engager une sur un malentendu. » (1)

(1) [en note non datée :] Oui. Mais en proclamant : « Pas de discorde entre Français [sic] », je m'avance sans doute beaucoup, semblant donner à entendre que j'adhérerai toujours aux directives du gouvernement de Vichy, si provisoire, – Toute déclaration me paraît imprudente, qui engage pour l'avenir.

[en note à la date du :] 5 juin -

Le long et filandreuse récit de cette séance n'a que faire dans ce carnet, et je voudrais qu'il ne figurât pas dans mon *Journal* si jamais il vient à être publié.

Je me rends bien compte, en relisant ce texte, que sa signification diffère suivant le ton dont il est [lu] dit. Il provoqua, de la manière que je le lus, l'indignation et l'enthousiasme ; coupé, si court qu'il

fût, à deux reprises par des applaudissements frénétiques. Quand je dis : l'indignation, c'est : contre la Légion que je l'entends. Et cela fut suivi d'un certain désarroi, car nombre de personnes, me voyant sitôt ensuite descendre de l'estrade, ne comprenaient pas bien encore que la séance était levée. Un chasseur en livrée vint annoncer que les places seraient remboursées ; [fait] assez saumâtre pour Stéphane car, au lieu de 8 mille francs de recettes, cette soirée se soldera pour lui par 2.000 de frais (affichage et location de salle). Mais il se montre très beau joueur et ne veut pas <m'>entendre [mes propositions de rembours.] <parler de prendre à ma charge ces frais.> Il admet volontiers, du reste, que cette soirée, loin d'être perdue, avait pris ainsi [une signification beaucoup plus importante que] beaucoup plus de signification que ne lui en eût pu donner ma conférence, si réussie qu'elle pût être. Les gens <cependant, s'étaient levés de leurs sièges, mais> s'attardaient dans la salle. La décence voulait que je restasse dans la coulisse et je ne [voyais, par un trou du rideau] pouvais entendre leurs propos, mais que j'imaginai d'après la grande animation de leurs gestes.

Que j'aie gagné cette manche me paraît évident ; d'une manière un peu [subtile] subtile, mais bien plus <efficacement> que je n'eusse fait en prononçant ma conférence, fût-ce en dépit de la Légion. Les 740 personnes venues pour m'entendre, moins peut-être une poignée de butés, sont repartis indignés [*sic*] contre elle et Tissot, le signataire de la lettre a dû se trouver quinaud en comprenant comment tournait l'affaire. (L'on me dit au surplus qu'il a été vivement tancé par certains de ses supérieurs et que le groupement des Légionnaires d[e]u département, qui déjà s'était exposé à des réprimandes, est menacé de sanctions) Mais il serait imprudent, je crois, de [marquer] chanter trop haut victoire : on pourrait bien, par la suite, me la faire payer. Et, du reste, la victoire, ceux de la Légion sont en droit de dire que ce sont eux qui l'ont remportée : ne sont-ils pas parvenus à leurs fins : m'empêcher de parler ? <Ⓐ> C'est précisément de cela qu'il me plairait qu'ils se targuent... En attendant, consigne est donnée aux journaux de ne point parler de l'affaire. L'*Éclair* et le *Petit Niçois* ont simplement dit que la conférence n'avait pas eu lieu. [Pour] Je ne puis compter que sur les [récits] <protestations> des assistants.

Je voudrais savoir s'il est vrai que certains Légionnaires, outrés, ont rendu leurs insignes [?]... (1)

[en note à la date du :] 27 mai -

(1) Au nombre de 160, m'a dit le Commandant Vautrin ; - [qui] <il> tient ce chiffre de Labat, directeur de la censure, qui, lui, doit être bien renseigné. (Nombre qui monta à 180, deux jours après.)

Ⓐ « M^r. André Gide, *se rendant à nos raisons*, n'a pas prononcé sa conférence », dit en effet la « Chronique de la Légion » de l'*Éclair* (26 Mai) après reproduction intégrale de leur lettre. C'est me faire reconnaître moi-même le bien-fondé de toutes leurs [imputations] <accusations>. - Après lecture de quoi, peut-être compteront-ils encore quelques nouveaux démissionnaires outrés.

[Roger Martin du Gard désapprouvait très fort cette conférence. Les arguments qu'il mettait en avant n'étaient pas de nature à me persuader. Et, comme je le lui avouais :

- Vous serez toujours le même, me dit-il : vous ne vous prendrez donc jamais au sérieux ?

Et comme ensuite il reconnaissait que toute cette soirée avait été une extraordinaire réussite :

– Ah ! parbleu, vous ne le méritiez guère. Mais vous vous en tirez toujours. Toujours vous avez <eu> de la chance.]

© Catherine Gide, 2008. Autogr., BLJD γ 1532, 7 ff. à petits carreaux 170 x 110 mm (dont 4 sont utilisées recto verso, 11 pp.), écrites à l'encre bleue. Fragment dissocié par Gide du manuscrit du *Journal* et versé au dossier relatif aux événements qui précéderent et qui suivirent l'annonce de la conférence sur Michaux à Nice. Cf. BLJD, Fonds Gide, Dossier A-II-23 (40) et γ 890-B 4-10. Dans la transcription de ce fragment manuscrit que nous avons voulue très exacte, nous avons utilisé deux signes conventionnels : sont placés entre crochets droits [] les passages, mots et lettres biffés par Gide ; entre crochets obliques < > ce qu'il a visiblement ajouté au premier jet de sa plume, en marge ou dans les interlignes.

LETTRE (INÉD.) D'ANDRÉ GIDE À PIERRE BRISSON

Cabris, 27 Mai [19]41

Cher Monsieur

Un coup de téléphone de Victor Grandpierre (l'organisateur du cycle de conférences à Cannes) m'avise du télégramme qu'il aurait reçu de M. [André] Warnod marquant le désir qu'aurait *Le Figaro* d'être un peu renseigné sur les incidents récents qui torpillèrent, à Nice, la conférence que je m'apprêtais à y prononcer. Je comprends que *Le Figaro* s'y intéresse, car, débordant ma personne, ces incidents rejoignent la querelle des « Mauvais Maîtres », dont vos collaborateurs (et particulièrement André Rousseaux) se sont occupés précédemment avec tant de pertinence.

Disons d'abord que le texte de ma conférence (ayant pour titre : *Découvrons Henri Michaux*) avait, ainsi qu'il sied, été préalablement soumis à la censure et reçu l'approbatur. Ce texte ne contenait du reste pas la moindre allusion à la situation ou aux événements.

Le matin du jour où je devais parler, une lettre de la Légion (Union départementale des Alpes Maritimes), signée, pour la Légion et au-dessous du timbre officiel : N[oël] de Tissot, me donnait clairement à entendre qu'on saurait m'empêcher de parler, si je ne renonçais pas de moi-même, et sagement, à me faire entendre.

Vous pourrez lire le texte de cette étonnante lettre dans le morceau d'*Éclairneur* ci-joint. Ce que ce communiqué de la Légion se garde de dire, c'est qu'au dernier moment la Légion s'était ravisée (entendez : ceux de la section des Alpes M^{sa} et sans doute sur désapprobation de supérieurs). Une heure avant la conférence, on me fit savoir qu'on consentirait à me laisser parler. Même (oh ! comble de bienveillance) on venait de donner des ordres pour que tout se passât sans chahut.

– La Légion revient-elle sur sa lettre ?

– Ah ! ça, non ! Elle en maintient tous les termes.

– Dans ce cas, c'est moi qui me refuse ; et l'auditoire saura pourquoi.

Lorsque je parus sur l'estrade, dans le grand hall de l'hôtel Ruhl, les acclamations de tout le public (car, sur ordre, la Légion s'était retirée) m'empêchèrent quelque temps de lire ce papier :

« Messieurs

Pas de discorde entre les Français. Tel est le mot d'ordre qui me domine.

Cet après-midi l'on m'a remis une lettre comminatoire de la Légion.

Il m'importe peu que ceux de la Légion se méprennent sur ma personne, mon œuvre ou mon action. L'amour-propre, ici, n'est pas de mise.

J'apprends au dernier moment que la Légion consentirait pourtant à me laisser parler. Mais mon point de vue reste le même : Pas de discorde entre les Français : Plutôt que de fournir un prétexte à des dissensions [*sic*] – encore que cette conférence, exclusivement littéraire, fût autorisée par la censure, par les autorités civiles et militaires – *taisons-nous*.

Tant qu'il s'agit d'art, je suis encore prêt à la lutte. Mais j'ai trop grand souci des intérêts de la France pour engager une lutte sur un malentendu. »

Cette courte harangue, plusieurs fois coupée par des applaudissements frénétiques, s'acheva sur des acclamations ; puis suivit une sorte de stupeur. Je descendis de la tribune et le public ne comprit pas [*sic, non biffé*] que la séance était achevée que lorsque quelqu'un, montant à son tour sur l'estrade, vint annoncer que tous les billets pris seraient remboursés. Cependant les auditeurs, par petits groupes, continuèrent à discuter avec véhémence, et ne se retirèrent que plus d'une demi-heure plus tard.

Il allait sans dire que la Légion chercherait à tourner le tout à son avantage, ainsi qu'il appert des dernières lignes de l'article de *L'Éclaireur*. Ce qu'elle ne dit pas, c'est l'indignation qu'elle a soulevé [*sic*] contre elle, même parmi ses propres membres : 160 de ceux-ci vinrent le lendemain rendre leurs insignes – dit un rapport de police (que je suis censé ne point connaître et dont je vous prie de ne point faire état.)

L'on me dit aussi que la section des Alpes Maritimes, déjà mal vue, fut réprimandée pour l'initiative qu'elle avait prise sans l'assentiment des chefs supérieurs – initiative dont, *en ne prononçant pas* ma conférence, je tenais à lui laisser la pleine responsabilité. Mais, de cette réprimande également, je suis censé ne rien savoir. Aussi bien, si *Le Figaro* parle de l'incident, qu'il le fasse avec la plus grande prudence, par grande crainte de n'attirer les foudres d'une organisation très puissante et désireuse de prouver qu'elle l'est.

Vous voyez, cher Monsieur, que l'affaire des Mauvais Maîtres n'est pas près de se calmer.

Quel que soit le parti que *Le Figaro* croira devoir ou *pouvoir* tirer de ces renseignements, je suis désireux que tout au moins vos proches collaborateurs en soient informés – et vous prie de croire, cher Monsieur, à l'assurance de mes sentiments les meilleurs.

André Gide.

© Catherine Gide, 2008. Autogr., BLJD Ms ms 50958 (1-6), 6 ff. 214 x 174 mm écrites au recto seulement (6 pp.) à l'encre bleue, sans enveloppe conservée. Le brouillon (très raturé) de cette lettre est aussi conservé à la BLJD, γ 133-11, 6 ff. formats divers, écrites au recto seulement (6 pp.) à l'encre noire.

LETTRES (INÉD.) DE PIERRE BRISSON À ANDRÉ GIDE

[Fin mai 1941]

Cher monsieur, j'envoie demain [*Maurice*] Noël à Vichy porteur de votre lettre pour signaler au Général Laure, chef de la Légion, le scandale de cet incident et le danger qu'implique le principe d'une pareille gaffe. Une consigne de censure avait interdit de parler de la conférence. C'est même par là que j'ai été alerté. Je demande qu'elle soit levée. Je vous tiendrai au courant.

Voulez-vous croire, cher monsieur, à toute ma sympathie la plus dévouée et la plus déférente et j'attends avec impatience votre article.

Pierre Brisson

© Jean-François Brisson, 2008. Autogr., BLJD γ 133-10, 1 carton bristol 105 x 140 mm (en-tête impr. « Le Figaro. Paris / Direction »), écrit recto verso (2 pp.) à l'encre noire, sans enveloppe conservée.

*

15 juin [1941]

Cher monsieur, l'écho que vous avez lu hier dans *Le Figaro Littéraire* est la demi victoire obtenue après quinze jours de luttes, d'insistances et de tractations. J'y tenais d'autant plus que les incidents ont coïncidé avec la publication d'une enquête sur la Légion qui tombait mal à propos et à laquelle il nous était défendu de changer un mot. Tout, d'ailleurs, nous est défendu et de plus en plus. J'ai besoin d'énergie pour ne pas abandonner le combat.

Voulez-vous croire, cher monsieur, à mes sentiments les plus sincèrement dévoués.

Pierre Brisson

© Jean-François Brisson, 2008. Autogr., BLJD γ 133-9, 1 carton bristol 105 x 140 mm (en-tête impr. « Le Figaro. Paris / Direction »), écrit recto verso (2 pp.) à l'encre bleue, sans enveloppe conservée.

* * *

Nous tenons à remercier très vivement Mme Catherine Gide qui nous a autorisé à consulter et à publier des documents inédits de son père et nous a apporté un soutien sans faille. De même nous sommes très reconnaissant à M. Jean-François Brisson, qui nous a encouragé en autorisant la publication des lettres de son père conservées aujourd'hui à la Bibliothèque littéraire Jacques Doucet.